
第2回 福祉のまちづくりモデル地区推進部会 議事録

平成19年1月17日 10:00～11:30 本庁西第1会議室

出席者(敬称略): 三浦、望月、長根、河合、宮部、國島、塩畑、柴崎、徳永、小原、上迫田(代理:田熊)

関係団体職員: さいたま市社会福祉協議会 大橋、久保田 さいたま市社会福祉事業団 船戸

事務局: 福祉総務課 高瀬、高根 コンサルタント (株)計画技術研究所 永野

- 1 開会
- 2 あいさつ
- 3 議事等

1) モデル地区における取組みの考え方について

事務局 資料確認

資料1 説明(省略)

<今回の取組みの課題を、次年度の取組みの検討に反映させていきたい>

三浦 「今後の課題」としてまとめているところは、どういう意味で捉えればいいのか。モデル地区推進部会の最初の取組みだったが、ここでまとめた今後の課題はどのような風に活かしていくのか。

事務局 来年度は、仲本小学校と、東口のまちづくりと合わせたなかで取組みを考えていきたい。今回、時間がないなかで高砂小との連携が始まり、見切りで動いてしまった部分があり、反省点が出てくると思う。そこを明確にしたなかで、来年度の活動に反映させられたらということで項目立てをした。

三浦 課題をそのまま読めば、小学校の授業との関係だけでない部分もあるが、その辺りはいかがか。

事務局 皆様方からいただいた感想を見ると、小学校との関わりだけでなく、地域に関わる様々な人たちとの関係をどうしていったらいいのか、ということも入ってくるので、その辺りは課題のなかでは意識しないといけないと思う。

<対象学年についてはどう考えるか 学年は関係ない。その学年なりの理解度がある。その学年に何を伝えることができるかを考えることが大切>

田熊 当日、参加できなかったが、対象学年について再考が必要という指摘があったということだが、4年生の授業として、元々組まれていたところに、取組みがあったと思う。こういう要望があったからといって、急に学校の授業を変えることはできない。本校でも4年が行っているし、3年生がやっているところもある。

事務局 対象学年は、それぞれの学年のなかでポイントとなる項目があって、そこに合う形で組み込みやすいということで、決めていった。

船戸 話を聞いていない子も確かにいたが、それは個々の問題であって学年はあまり関係ないと思っている。逆に、親御さん達にもよく聞いてもらいたかったという思いもある。

「学年なりの」という言い方をすることができると思うし、学年を超えて「その子なりの」受け止め方があると思う。もう少し言うと、大人目、福祉に携わる人間として「こういう答えが出るだろうな」という思いと、そうでないことにも気づかされている。例えば、駐車場で、障害者スペースの側に駐車場の料金払い機があったが、そのボタンは車いすでは届かないものであったことに、子どもたちの意見を受けて、はじめて気がついた。

ある期待する答えがあるのであれば、学年が高い方が理解度が高いという言い方ができるかもしれないが、4年生であれば、4年生なりの理解度ということで、気づく面もたくさんあると思う。

聞いているか聞いていないか、ということは、持っていき方の問題。当日の班編成や企画のレベルのことなので、あまり囚われなくていい。

総合学習だから4年生となってしまうとおかしな話になるが、逆にそうであれば、いる子どもたちに何を伝えていくか、何に気づいて欲しいか、その子どもと大人・地域の大人・我々も含めて何を考えていけるのか、ということだと思う。

<今回のプログラムは、障害者の問題を一緒に考えていけるいい企画だった>

<授業の場だけでなく、自分の家に帰って親にも伝えてもらいたい>

河合 聴覚障害者協会から2名参加した。今まで、総合学習で呼ばれて話をすることがあったが、一方的に学ぶだけで終わってしまうことが多い。今回は、具体的な事実に触れながら、障害があった場合にどうか、実際に自分で体験して、それだけではなく一緒に問題を考えるということができた面ではいい企画だったと思う。

問題は、学校だけでなく、お子さんが家に帰って、問題を一緒に考えることができるのかが課題。この機会に、子どもさんたちが関心を持ち、社会に目を向けるきっかけとなってもらいたいと思う。

バリアフリーといいながら、ハード面だけでソフト面は取り扱われないことが多い。聴覚障害者の場合は、問題が抽象的で、障害者の問題は固定観念になりがちだ。ろうあ者だというと、手話と思われてしまう。日常的な場面では、疎外されている。例えば、事故があった場合にエレベーターにインターホンしかないと、外と連絡がとれない。モニターテレビをつけてほしいとか、扉をガラスにして欲しいと言っているがなかなか進まない。

まちづくりという問題では、「行政が行政の力では限界があり、一般住民の力を借りたい」ということはよく分かる。しかしながら、障害者は自分の自治会には参加できていない。一度でも、地域で障害者の問題を考えたことはあるか。学校の授業だけでなく、地域のネットワークやコミュニティというところに、伝えていってもらいたいと思う。

<高砂小の先生の感想を聞きたい 推進協議会に出席してもらおう>

徳永 今日高砂小学校の人は出席していないのか。

三浦 今日は参加されていない。

徳永 今日の議論は、高砂小には伝えないのか。今日の議論に対する、学校の方の意見を伺いたいと思う。

事務局 議事録は報告したい。先生方の出席は、平日の午前中ですので難しい部分もあり、仲本小の田熊先生にはご出席いただけて有難いと思っております。

三浦 先生に資料を作成してもらったのは、有難いが、先生の感想がない。2月5日にご出席いただけるなら、そこで伺うこともできるが、できればお一人の感想ではなく、このカリキュラムを組まれた先生の中で話し合いをした結果をお聞きしたい。

小原 私も同感だ。今日は仲本の教頭先生がお見えになっているが、高砂小の先生にもご意見があったと思うが、そこが重要だと思う。それを皆さんにお話していただいた方が次回の参考になると思う。

<この問題は地域で考えていかなければならない。地域の人にも関わってもらおう方が、より効果が上がるのではないかと>

小原 私は地域の代表として出ていたが、この問題については、地域に関わる問題の方が多い。子どもだけでなく、地域を含めた考え方をしないと、バリアフリーは解決しないと思う。西口の綺麗になったところで体験をしたわけで、一般のところはもっと悪い。そういうところを歩いて初めて分かることもあると思う。次回の時は、そういう点を取り入れたところとして、地域の人にも関わってもらおう方が、より効果が上がるのではないかと考えた。

<子どもたちの興味に応じた対応をした先生がいたが、とてもよかったと思う>

<まちあるきには、保護者の方に参加してもらえてよかった>

<歩く距離はもう少し長くした方がいい。券売機なども体験してもらいたい>

長根 3回目のインタビューの時だが、一人の先生だけが、特定の班だけでなく、「どこの班に行って話を聞いてもいい」としたことがあった。4つのクラスでいろいろやったが、その先生だけだった。その場の判断でやったことだろうが、あれがとっても良かったと今でも思っている。先生相互の連絡があれば良かったと思う。

まち歩きは保護者の方も一緒だったが、「私たちも知らなかった」ということで、ご両親も感心を持って取り組んでくれた。これは次回も続けられると大変にいいことだと思う。

歩く場合の距離が少なかった。もう少し歩く場所を多くして、今度は東口ということなので、今年体験できなかったこと、例えば券売機の問題などを子どもたちによく知ってもらおうことも大切だ。

<子どもたちが学んだことをどう活かすのかをケアしていくことが重要>

宮部 子どもたちの発表の中で、子どもたちから教えられたこと、新しい視点の発見もあって感動した。

発表の中で、「障害のある方に優しくしたい」と皆さん声を揃えて同じことを言っていたが、障害のある方に優しくするとか、声をかけることはとっても大変で勇気のいることだと思う。それを実際にできる方法というか、身近なところからやっていく方法、どんなことからはじめたらいいか、ということも含めて、今後のケアもとても大切だと思う。

<優しいまちづくりのためには、一人ひとりが地域でやさしくなることが大切>

第一歩として「隣のクラスメートに優しくすることからはじめることが大切」というその後へ繋げられると良かった>

宮部 そのなかで知的障害者のことを話す時間を頂いたが、子どもたちは真剣に話を聴いてくれたことは有難かったと思う。障害のある方や地域の方みんなを含めて「優しいまちづくりをする」ということは、一人ひとりが優しくなることだと思う。「優しくする」ことは大切なことだが、「優しさ」の第

一步をどう踏み出すかはとても大事なこと。

船戸 今回の取組みで障害のある方を理解することはある程度できたと思う。
一方で、きれいな言葉として、「障害のある方に優しくする」ということを実践するには、あなたの隣にいる人に優しくすること、という言い方もできる。その中に障害のある人も入ってくる。そういうなかで、人間観が広がっていくならいいが、単にお題目として、「障害者に優しくする」ということだけを言って終わってしまったのでは課題を残してしまうのではないか。

2) 次年度の仲本小学校における進め方について

事務局 資料2説明(省略)

<仲本小では、地域の方の協力が行われている>

田熊 仲本小は、地域の方に協力を頂いて、運営されている。いろいろな学校を経験したが、仲本小ほど地域の方が協力くださるところはなかった。明日も1年生の「昔遊び」が行われて、7グループに33人の地域の方が参加してくれる。そういう授業が年間を通してたくさん開催されている。

保護者の参加も非常に良い。「まち探検」ということで、現2年生のお母さんたちも、よくついでにきてくれるので、その点では大丈夫。

心配なのは、3年生という学年は、高砂小の4年生よりも幼くなるので、その点が心配。

<新しくできた施設とそうでない施設を比較してもよい いろいろ見て、発表の時に共有できればよい>

<新しくできた施設を見ることは、今の時点でつくったものを知ることも意味がある。その上でハードだけでは足りないこと、ハードで足りないものをソフトで補うことが大切であることを知ってもらいたい>

<3年生だと、室内よりも、屋外(駅前や建物の周り)の方がいろいろな発見があるのでは>

<市民活動サポートセンターでは、施設の完成後、オープンまでに運営試行をする予定。障害のある人の利用も想定した試行をしたい>

田熊 調べに行く場所として、コミュニティセンターと市民活動サポートセンターの2カ所に百何人が行くとしても、自分たちが発見したい「まちの優しさ」に合うかどうか疑問。今までは、公民館や駅など様々なところに行っているんで、まずはそこに行ってみるといのもある。

徳永 新しくできる施設だけでなく、今現在もそういう働きをしている施設を見て、「それが新しくできる施設では、こう変化しました」という流れにしてはどうかと思う。百人が同じところに行く必要はないので、市役所なり病院なりどういう工夫をしているのか。新たにスロープをつけた施設と、当初からバリアフリーで作られた施設を比較しても面白い。

三浦 (仮称)市民活動サポートセンターは、さいたま市では、全く新しい施設。市民活動団体が運営にも参加して運営する。今、施設をつくるにもワークショップみたいな形であらゆる市民が扱いやすいようなユニバーサルデザインの施設としたいという動きがある。

10月の頭に施設が完成して、11月にオープンする間に、時間をとって、市民運営などの検討をすることになっている。その間に、部会なり推進協議会に関わっている方に参加していただいているかどうか。万全を期して作っても駄目なところはある。ハードで駄目なところがあれば、人的なところで対策を考えるなどしてオープンを迎えたいという思いがある。推進協議会に参加している障害のある方にご協力いただいて、職員が適切に応接できるか、避難経路はどうなっているかなどのチェックをしたい。それと、今回の仲本小の施設見学と一緒にできればできるし、別々にやってもいい。

三年生だと、よく整った部屋の中よりも、駅前、駅前は大きく変わるし、建物の周りであったり、地域の施設を見て、新しく整ったところを見て、「新しいところはこういうところがいいね」「新しくなってもまだ駄目だね」などという確認ができると思う。

船戸 新しい建物を見ることには意味がある。エイペックスでもそうだったが、その地点で整えたものはいつまでもそれでいいということではないが、今の時点で作ったものはこうだというものを見せてあげることは必要。さらにそれでも成功していなかったり、不便だったりということがあれば、子どもたちの目で発見してもらうことは必要。

すべてのまちが100点になるわけではないので、やはりハード面で足りないもの・ハードでカバーできないものを補完するのはソフト。「ハードが不便でもソフトが充実していれば暮らしやすいまちになる」ことを子どもたちに分かってほしいし、掘り起こしてもらいたい。

新しいところをせっかく見る機会があるのであれば、見てもらったほうがいい。それを東口でやる意味はある。それと同時に、旧来のまちのなかで、便利に暮らしていくためには、どんなことが必要か。それは答えがないかもしれないが、子どもたちの目で「まちの優しさ」を掘り起こしてくる。比較することも大事だし、古いところでも何かを工夫するハード面があれば、それを発見できるといい。

あまり広げすぎると焦点がぼけるが、街なかにはいろいろなところがあるということ、発表の時に共有できるようにするといい。全員が同じ体験をする必要はない。三年生の段階で見つけられなければそれでいい。もう少し大きくなったときに発見できるかもしれない。むしろまとめのところが工夫することが大切。いくつかポイントを設定して、そのときに何をするかを考えるなど、何らかの種を蒔いていく方がいい。

<地域の参加体制は 仲本を中心とした仲本コミュニティ会議があり、4年間の活動実績がある>

国島 地域の参加はとても大切だ。どういう体制で取組むのか。

小原 仲本小の地域は、区民会議で、仲本コミュニティ会議というのがあり、4年間の実績がある。各自治会が仲本小を中心に、民生委員も立ち会い、商店街も入って網羅されている団体がある。一つ声をかければ、各組織から皆さんが集まってくれる。4年間の実績がある。

すでに、駅前に花壇をつくって、花を植えるということをやっている。バリアフリーという点でも、回って考えた実績があるので、声をかければ、皆さんが協力してくれると思っている。

<家庭との連携について 親たちのコミュニティ、地域の動き方とどう連携がとれるか。親たちが頑張っていることを子どもにも発見してほしい>

柴崎 学年が一つ下がるということで、家庭の役割もある。お子さんに「家庭で話をしたのか」と聞くと「話してない」と言われてしまう。親子での話し合いを促せるといいと思う。

望月 高砂小の事業には参加できなかったのは申し訳なかったと思う。

小原委員の話を聞きながら思ったが、福祉のまちづくりのモデル地区のための一つの実験ということがあるのだから、モデル地区というのは、さいたま市内で「あそこを目指そう」という状況をつくっていかねばならないと思う。小原さんからお話があった「地域住民のまとまり」がさいたま市内ではまだまだ少ない。地域の中でいろいろと話ができるようなことを数多くつくる必要がある。それが福祉のまちづくりの基本だ。

今、仲本地域で進められている親たちのコミュニティ、地域の動き方が参考になって、他の地域にも参考になるようにできると一番いいと思う。

三年生なりに、うちの地域はお父さん・お母さんたちが頑張っているということを見えるようになればよいと思う。

<障害のある方とのふれあいの時間は大切 地域に住む障害のある方に参加してもらえるといい。>

ボランティア団体の人にも参加してもらえるといい>

三浦 高砂小の時には、障害のある方と子どもたちとのふれあいの時間が長くて、障害のある方の生活を知った上で、まちを見るということが必要だとおもう。

子どもたちが、障害のある方のことをじっくり知ることが必要だ。

地区にお住まいの障害のある方とコンタクトを取れば、より実感できるのではないかな。

小原 そういう人たちとコンタクトをして、いろいろな体験に参加してもらうことが大切だと思う。今言われていることは大事なことだと思う。子どもさんたちに、障害者の実態を見てもらうことが大事。

河合 地域の参加と言うと、一般市民の参加となると思うが、障害者を支えるボランティア団体の人にも参加してもらえるといいと思う。

<「何を伝えていきたいか」については、共通認識を持つことが重要。支援する側が「優しくする」という価値観を持っていると、それは子どもに反映される。共通認識を醸成する課程が福祉のまちづくりに繋がる>

<高砂小の取り組みでも、「どういう声かけをしつらいいか」については伝えつつもだが、全員が共通認識を持っていたわけではない>

<子どもたちが現場に出たときにすぐに使える方法を教えてあげたい 「～～思いました」という発表から実践に結びつけるためには、フォローが必要>

徳永 お母さんに、自分の体験を話してもらいたい。お腹が大きい時・ベビーカーを押している時、おばあちゃんの手押し車のこともある。車いすでなくても不便なことはあると思う。

大橋 関わる・支援する側がどんなこと、どんな価値観を伝えていきたいのか、についてはそれを詰めた方がいい。

福祉教育でよく言われることだが、障害者や高齢者に「優しくしてあげよう」という価値観は救貧的・貧困的であると言われる。障害者や高齢者の権利は守ってあげるモノではなく、保証されるべきものである。それは、障害者運動の中で獲得してきた権利であり、守ってあげよう、余力があれば何かしてあげようというものではなく、守らなければならないものである。障害者や高齢者に「優しく

してあげよう」という感覚を指導する側が持っている、それは子どもたちに跳ね返ってしまう。
地域の人たちが、子どもたちに、どういう福祉観を伝えていくのかを詰めることが、福祉のまちづくりに繋がっていくのではないか、

田熊 「子どもたちに感じてほしい」ということの中、高砂小の発表で「優しく声をかけていきたい」といいます」という発表があるというが、その時に、もう一步踏み込めないのは、「どうい声をかけてほしいのか」「どういふうに声をかけられたら嬉しいのか」子どもたちは体験者でないのだから。その人たちがどうして欲しいのかについては言わなければならない。観念論でなく、空想や希望ではなく、その場から離れても、心に残るように、子どもたちが実際に現場に出たときにすぐに使える・行動できる方法を教えてあげることができれば一番と思う。

宮部 「私に何かお手伝いできることはありませんか」と声をかけてほしい。障害当事者が自分でできるという気持ちも尊重してほしい。お手伝いできることはありませんか、という気持ちを伝えることが大切。

田熊 そういことを、子どもがインタビューで聞き取りできるといいい。

柴崎 今回の授業でも、そういことは私たちからは話をしているし、家に帰ったらお話ししてね、といいうことは言っている。

久保田 「車いすに乗っている人に、どんな風に声をかけたらいいのか」についても、伝えていった。個々では行われていたと思う。

船戸 実際の場面で、ほとんどの方がそういやり取りはしていると思うが、全員がそうい共通認識を持っているか、といいうと自信がない。そうい確認を全体でしていたか、といいうとそうではないので、きちんと確認することは必要。

現場ではそうであっても、最終的にまとめの部分でそういまとめをしたか、その後のフォローでそういことを先生たちから伝えてもらえたか、といいうとそうでもない。

一部ではできているが、次にやるときには、具体的に共有し、伝えていくための取り組み方をしていけるといい。

< 仲本小の取り組みでは発表して終わりではなく、その後に子どもがどう実践し、どう感じたかについても伝えていきたい >

久保田 プログラムのところ、ステップ 4 で子どもたちにまとめてもらった発表があるが、高砂小さんの発表で「～思いました」といいう発表があったと思う。その先に、どう実践したか、その時にどう感じたかについても経過的に追えるといいいと思う。

大橋 子どもたちだけで問題解決をするのは難しいと思うので、地域の方々と一緒に問題解決をするといいうプロセスを踏むことが必要だと思う。

< 駅前だけでなく、地域のいろいろな問題を感じてもらいたい >

三浦 いろいろアイディアも出たし、地域の方も濃厚な参加が期待できるといいうこともある。

駅はまだ整備途中で、駅前広場はまだ暫定整備といいうことで、まちはまだまだ変わり続ける。三年生の段階で、自分たちが中学校に上がる頃にできあがるまちについてイメージするといいうことになる。

小原 駅前は一部しか見られない。その他の地域のいろいろな問題を、感じてもらうことが大切といいう気もしている。

< 一回きりで終わらないために 継続的に子どもに取り組んでもらう方策、他地域に広げていくための仕組み・方策を考えることが必要 >

船戸 モデル事業として、それぞれに部会としては終了させていかないで、複数年度で持っていくようなやり方はないのか。3年生では課題解決が難しいといいう話があったが、4年生になった時に、もう一度それを取り組めるような形ではどうか。その間ずっと追いかけるのは大変だが、一回で終わるものではないものとするために、この授業があつて、来年また同じテーマに取り組む、あるいは3年生の中でこういことに重点的に取り組む班をつくるなど、部会でやるべきなのか、学校にお願いするべきなのかは分からないが、一度で終わらないような仕組みを考えたい。終わりました、報告出ました、後は学校でフォローしてほしいだと、「体験しました」で終わってしまうのではないか。

三浦 そもそもこのモデル事業は、ここだけを良くすればいいといいうものではなく、ここでやったことを全市的に広めていきましょう、といいう事業。その役割を果たすためにどうしたらいいか、といいうことも考えなくてはいいけない。

船戸 例え、高砂や仲本でできたことをそのままにしておいたらそれで終わってしまう。地域を広げた

り、継続させたりしていく方法、終わったことをきちんと語ること、などが必要。一過性にしないための方策を次の時には考えたい。

三浦 ありきたりかもしれないが、定期的に市報に、推進状況についての記事を載せるなどの伝える努力は必要だと思う。

事務局 ホームページには、活動経過は載せている。

モデル地区としてこういう活動をしたことを伝えていくことは必要で、今回は、交通バリアフリーの基本構想の中で、浦和駅周辺のことに取り組んだが、この経験をまとめて伝えていくことも必要。市内の小学校さんからも、同様の問い合わせもあるので、こうした活動経験をフィードバックしていくことが必要だ。

4 閉会

<今後の予定>

三浦 2月5日の推進協議会の後、また部会を何回かやりながら、今後の活動を固めていく。

事務局 今日の議論を踏まえて、また資料を作成したい。できたら3月以降に再度部会を開いていきたい。

三浦 2月5日には今日の話をするのか

事務局 第二期の推進協議会の活動に関する事項、本部会の活動内容や交通バリアフリー専門部会の活動について説明したい。今日の結果を確認した上で、次回の日程についてはまたご案内したい。

以上